

高橋五郎著

# 中国土地私有化論の研究

——クライシスを超えて

日本評論社／2020年10月／420頁／5000円＋税



## 金 湛

### はじめに

農業は食料の安定的供給と農民の所得向上だけではなく、多くの国と地域では伝統的な文化や価値の伝承を担っている。したがって、食料安全保障だけではなく、社会の持続的発展にも欠かせない。にもかかわらず、二元経済モデルは経済的な合理性だけに注目して、経済発展過程における二つの異なる経済部門間の関連について検討してきた。その考えは開発経済学あるいは経済発展論における工業化や資本主義的発展に関する代表的な理論として幅広く応用されてきた。

二元経済モデルでは、工業部門は農業部門から生存維持レベルの低賃金労働力の供給を受けて、利潤を確保し、資本蓄積を行うことで成長する。農業部門は労働供給を続けるが、不完全就業状態の余剰労働が存在するため、食料の生産量は減少しない。農業部門における余剰労働人口が枯渇する「ルイス転換点」に至るまでは、工業部門が成長することにより

経済全体の成長をけん引する。そして、「ルイス転換点」に到達すると、労働力不足が生じ、労働者の賃金率は生存維持レベル（生存賃金率水準）にとどまらず、上昇圧力が生じる。転換点を過ぎた後、工業部門では労働節約的技術の採用や労働生産性の向上などが行われなければならない。労働コストの上昇が利潤を圧迫するようになる。農業部門では、生産性向上を図る（＝投入／産出比率を改善する）か機械化による大規模化を行わなければならない。農業生産の減少を招く。農村の貧困解消について、開発経済学では農村の余剰労働力の解消と同義と見なされ、それは工業部門の成長により労働力が非農業産業に吸収されることによって実現されると考えられる。

ところが、一九七〇年代以降の日本や二〇〇〇年代以降の中国は、資本主義的農業経営と労働者に両極分解したイギリス産業革命期の古典的工業化過程とは異なり、食料や原材料の調達を海外との貿易拡大で図り、工業部門の成長により労働力が吸収されるが、必ずしも農業生産

の発展を促すことはなかった。さらに、他の産業と比べ労働環境が劣悪である農業は、気候に影響されやすく、収入が不安定であり、他の産業との市場競争が展開できず、衰退の一途を辿った。以上の問題意識を持ち、本書は中国の食料供給モデルが直面する様々な危機とそれを乗り越える方法についての議論を展開する。

## 本書の構成と概要

本書は、農民における経済的、社会的選択を念頭に、中国の食料供給モデルを生成、形成、成長、増進、危機及び再編の六つの時期に分けて、自然環境と人口変化を踏まえて、生産態勢、労働力の調達、資本の調達、土地所有・利用等の社会制度、組織形態、技術条件等の指標を用いて、それぞれの時期における農業生産の性格を規定する要因を検討する。特に、中国で起き続けてきた土地制度の改革目的、内容、手段、もたらす結果に注目して、議論を展開する。

構成は「はじめに」と「むすび」を除いて、以下の一五章からなる。

序章	クライシスのフレームワーク
第一章	世界発クライシスと中国への影響
第二章	中国発クライシスと食料インフラ
第三章	世界と中国の食料供給クライシス
第四章	中国式食料供給モデルの主役と脇役
第五章	土地生産性分析——クライシスの諸相(1)
第六章	国際競争力分析——クライシスの諸相(2)
第七章	拡大する入超品目分析——クライシスの諸相(3)
第八章	拡大する中国の入超先の世界化——クライシスの諸相(4)
第九章	閉じられた自立——農民経済のマクロ分析
第一〇章	土地公有制のクライシス
第十一章	「土壌」資本クライシス
第十二章	土地私有化論の導因
第十三章	土地私有化への準備——食料供給クライシスを超えて

終章 中国土地私有化論の嚮導——土地は農民の手に

各章の内容を概観すると次のようになる。序章では、中華人民共和国成立以来の発展を多元的に支えてきた食料供給モデルが危機に直面している状況を指摘し、食料供給モデルを建て直すのに考えられる対策のうち、農民自身の責任能力やあるべき体勢に重点を置きながら、土地と農民との関係に焦点を当て、中国の土地私有化論に導き、本書の狙いと意義を説明している。

第一章から第三章までは、世界規模で起きた環境問題、土地生産性の格差と限界、貿易環境の問題、中国国内におけるエネルギー消費、人口問題、土地問題、環境危機、食料供給における交易条件と推移の三つの側面から中国の食料供給モデルが直面する危機の背景について説明する。第四章は、中国の食料生産に影響を与える土地利用、農業技術、農業機械、農業・化学肥料、灌漑システムの諸要素の投入について、推移と変遷を振り

返って、現在に至る経緯を説明する。また、これらの生産要素の投入の結果として、第五章において農作物と畜産を品目ごとの生産性を検討し、土地生産性が低い実態と理由について検討する。第六章では、食糧供給国から輸入国に転換した事実を踏まえて、鶏卵以外の生産者価格の高騰に伴う中国の国際競争力の低下及び食料と飼料の自給の限界を指摘する。第七章では、輸入超過拡大の実態を品目ごとの分析を用いて、世界食料貿易における中国の急激な地位変化を示す。第八章では、中国の農産物貿易相手国の立場から、その輸出余力の変化や輸出先の拡大による対中貿易への影響を検討する。

第九章は、多様かつ詳細な統計資料を用いて、マクロの視点から中国の経済成長が農民経済に及ぼす影響、とりわけ所得構造、農業収益、農村貯蓄の変化を分析する上、農業固定資産投資の拡大と限界を説明する。また、農業所得水準の低下や労働力・人材の不足が将来的な農業発展への影響を指摘し、社会保障が担う農業経済、農村社会における社会的再生

の問題点と可能性を分析する。

第一〇章から第十三章までは、本書の狙いである中国土地私有化論に向けて、土地制度の歴史と限界を踏まえ、土地公有制がもたらす生産システムへの危機、「土壌」資本の構築への危機を論証し、土地私有化を導入する理由を因果的に検討する。さらに、食料供給モデルの危機を克服するための条件と期待する効果を説明する。終章では土地私有化に対する様々な議論を踏まえ、法的根拠を検討する上で著者が自らの観点を明示して本書を締め括る。

### 本書の特徴

前述のとおり、本書は中国の食料供給モデルが直面する危機的状況を皮切りに、環境、人口、農業史、農業経済、労働経済、農業組織、農業技術、社会制度に関連する指標を用いて総合的な分析を行うものである。この多分野横断的な分析を一冊の著書にまとめるには、各分野に関する理論だけではなく、それぞれの分野に相応しい研究方法及び資料収集や利

用に関する高度な知識が要求される。農業生産に関わる様々な側面の特徴を正確に把握し、緻密な推敲によって表面的な現象の裏に潜む問題の本質を捉え、様々な議論を踏まえて大胆な提案を行うこの試みは、中国農業及び農村の現状をよく知る農学、農業経済学の専門家である著者だからこそできることといえよう。

本書のもう一つの特徴は方法論を強く意識する点である。農業、農村研究に共通する問題を抽象的、普遍的に捉え、中国における「固有の、宿命的な、所有格で表現できる食料供給モデル」(一八頁)の存在を否定しながらも、一般モデルが中国の状況に如何にして応用されるかについて、中国の自然的、歴史的、制度的な特異性に注目して、共通性と特殊性の両方から実践的に取り組んでいる。一般的な枠組みの中で、各指標の量的な変化ないし相違が最終的に特異的な結果をもたらす過程を演繹的に検証することで、農業経済学における中国の位置づけを明らかにする。各章の執筆にあたって、専門書や論文を参照する上、政府の統計資

料や法律、規定を始めとする各種の資料と情報を巧みに利用するだけではなく、農村の現場では人を観察し、農民と話し、土を握るといった緻密な現地調査によって第一次資料を集める。実践的取り組みによって得られた豊富な証左資料と資料に対する的確な処理、分析、考察が著者の推論を強くサポートする。

本書の三つ目の特徴は各章の構成が理論的枠組みの中で厳密な推理によって組み立てられた点である。本書の冒頭に各章の関係を示すフローチャートが提示されるため、各章の位置づけと役割が明確に示される。理論的枠組みに用いられる概念と推理方法を明示することで、読者は本書の理論的展開を俯瞰することができ、著者の主張をより簡単に把握する。この理論性と論理性の両方を重視する手法は、研究者を目指す大学院生や若手研究者だけではなく、農業経済や中国研究を行う者にとっても大いに参考になる。

## 本書の意義とコメント

筆者が考える本書の意義は、まず農民

の立場と選択に注目する点である。二元経済モデルにおいて、非農業産業の下請けとなる伝統的な農業部門に所属する農民は選別される対象と位置づけられる。彼らは工業部門に雇われることを心待ちにして、いつも農業からの脱出を夢見ると描かれているように見える。しかし、現実では工業社会と異なる人的、経済的、社会的つながり、いわゆる農村社会の文化と秩序を構築したのは農民による社会的選択の結果でもあり、農民が適正な量の労働を所得に照準を合わせて経済的な選択を行うようになれば、農村は崩壊する。そう判断した本書の著者である

高橋氏は、人民公社、大躍進、請負制、土地流動に基づく大規模化といった、起き続けている土地制度の改革の中で、中国の食料供給モデルが十分な実力を発揮したかに対して疑問を持ち、中国経済の発展と農業生産の拡大の裏ではシステムを蝕む歪みが拡大したと考えている。そう判断する理由について、高橋氏は一連の政策の転換と経済発展が中国農民の食料供給者としての主人公意識を失わせた

からと考えている。食料供給システムを安定的に維持するため、農民にとつての農業は、生計を立てる手段だけではなく、文化や価値そして技能と経験の伝承を担う手段としての認識の継続が必要不可欠である。そして、その認識の継続には農民や農業に対する社会的な承認と支援が必要である。

二つ目は抽象的、汎用的な一般モデルを意識しながら「ルイス転換点」を否定的に捉える点である。短期間で農業生産性と農民所得の上昇を目指すだけでは三農問題を根本的に解決することはできないと考える筆者も二元経済モデルに対して批判的である。ただし、短期的な経済政策や開発戦略の妥当性ではなく、その国の歴史と政治経済構造を総合的、複合的に問題にするべきと主張し、「地域発展の固有論理」といった地域研究のアプローチを採用する筆者の考えと若干異なる、著者は農業と他産業との市場競争論を展開できないとの見方を強調している。

二元経済論は農業の特殊性、地域多様性と社会の各主体における複雑な関係

を無視しており、理論の成立には農業と非農業産業との間における市場競争の成立が前提条件となる。二元経済論ではルイス転換点を通過後、労働市場が統一され、賃金は限界生産性に従うことを考えているが、現実的に考えると異なる技能には産業的な特殊性が存在するため、労働者の移動は簡単ではない。ルイス転換点の通過前でも部門間の食料調達の問題があり、労働者の移動の前提として安定的な食料供給、すなわち農業部門の生産性の向上が求められる。さらに、産業的特殊性からみて、農業は生産の中止と再開を繰り返すことが簡単ではなく、労働力の確保が困難で、工業部門との交易条件による影響を受けやすく、開放市場では輸入による影響を受けやすいなど、他の産業との市場競争を容易に展開できない。著者は、農業生産を持続的に行うには「農民に一定以上の補助と武器を与える」ことが必要不可欠であり、社会の責任でもあると指摘している。

以上の主張を踏まえて、著者は中国における土地生産性の問題、国際競争力の

問題、輸入超過の問題、入超先の世界化が引き起こす中国の食料供給モデルの危機を乗り越えるには中国農民の土地投資、農業技術の改良、灌漑システム等の生産環境の改善、化学肥料と農業の適正使用が前提となり、これらの前提を満たすことこそ農民の所得や生産意欲の向上につながることを主張する。そして、これらの前提が成立する必要条件として、土地公有制がもたらす危機を克服しなければならず、農民の手に土地を渡す考えを著者は切実に訴えている。

以下では気になった点について議論してみたい。筆者は著者による「土地の所有権を国家に、使用权を農民が分かち合う均田制は改革開放後の請負制と、永佃権に基づく一田両主制は今日の三権分置の骨格とよく似ている」との主張に同意する。また、これらの土地所有制の問題点に対する指摘にも賛成する。しかし、本書の趣旨である土地の私有化を主張するならば、以上の所有制にない私有制のメリットを提示し、比較すべきである。

例えば、「永佃権は土地所有者の知らぬ間に小作情農から小作精農へ移動し……田面権そのものの売買、貸借による土地権利の流動化が常態化、小作人間の貧富の差……地主・佃農間、佃農間の紛糾が多発するようになる」(二七四頁)との指摘は妥当である。しかし、永佃制に類似している三権分置の下では土地の流動は請負権ではなく、耕作権に限定することが多いのは現代の特徴である。また、身分制度をとらない現代社会では農民は土地を所有しながら離農することもできる。そうすると、移転しない請負権はその所有者に資産収入をもたらすだけではなく、所得を失う場合の最低限のセーフティ・ネットにもなる。それに対して、私有制に基づく土地売買は所有権と耕作権を同時に移動するものであり、土地権利の小作情農から小作精農への完全な移動となるため、三権分置より深刻な農民の階層分化をもたらすことが考えられる。私有財産として土地を手に入れた農民は土地に対する投資を拡大し、積極的な利用方法を模索するのである。その農

民の行為と農業生産に対する効果は確かな所有権によって保障される。そういう意味において、請負権の永久的な確立も同じ効果をもたらす。無論、その場合では請負権は実質的な所有権とみなされる。

本書の最後では、著者は中国の憲法と民法を用いながら、歴史的経緯を踏まえて土地の私的所有権の合法性を論証する上、土地私有化論への賛否を取り上げながら、私有制の意義を主張している。中国の社会主義国家という政治体制を考えれば、土地私有化の容認は政権の根幹を揺るがしかねず、為政者による拒絶が予想される。学者は政治に影響されず、学問を追求する立場に立ち、社会現象を如実に捉え、理論的、論理的、抽象的に検討、考察、説明することが重要であるとはいえ、中国の現状を考慮して、土地私有化という著者の主張はいささか理想主義的ともいえよう。さらに、中国の食料供給モデルの状況を危機的と認識し、その緊急性と重要性を考慮して、即効的な次善策への提案も期待される。

最大の人口と食料輸入の規模を持つ中

国における安定的な食料供給は、五・五億の農村人口、約二億の農業従事者の生計、国内の民生だけではなく、世界の安定に影響を与える課題といっても過言ではない。本書はこの問題に注目し、複数の分野から総合的な枠組みを構築し、緻密な調査研究を踏まえて考察を行った。土地所有制に対する検討について、議論する余地を残したものの、本書を嚆矢として、今後より多くの研究者、行政関係者が議論に参加して、この分野におけるさらなる研究の発展を期待したい。

以上、本書の意義と疑問点などを指摘してきたが、社会的重要性に気づき、学術的に発信してきた著者の貢献に敬意を表する。評者の不勉強や誤読により不適切な指摘をした可能性も否めないが、その点については、著者ならびに読者にお許しいただきたい。